

## 平和と赦し

仙台宮城野教会牧師 齋藤 朗子

聖書 ヨハネによる福音書20章19~29節

<sup>19</sup>その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。<sup>20</sup>そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。<sup>21</sup>イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」<sup>22</sup>そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。<sup>23</sup>だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

<sup>24</sup>十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。<sup>25</sup>そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」<sup>26</sup>さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。<sup>27</sup>それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じないでではなく、信じる者になりなさい。」<sup>28</sup>トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。<sup>29</sup>イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

『聖書 新共同訳』

---

今日のみ言葉のなかで、イエス様は3回、「あなたがたに平和があるように」と願ってくださっていることは、とても印象的です。3度も繰り返される、弟子たちの平和を願うイエス様のお言葉を繰り返し味わうと、イエス様のご復活は、信じる人々が平和を得るための基なのだ、と思えてきます。

「平和」は、「愛」と「赦し」のある関係性のなかで作りあげられてゆきます。愛と赦しのない世界には、平和は実現しません。いま私たちは、「愛の冷えた」、終わりの時を生きています。私たちは日々の生活の中で、大なり小なり、愛し愛されることや、赦し赦されることの乏しさを覚えたり、平和とは真逆の雰囲気や緊張感を持ちながら暮らしています。

しかし、イエス様のご復活されたことは、愛は死なないことの証明であり、人は赦されるということの保証です。互いに愛し愛され、赦し赦される関係性の中で、平和は実現し、広がっていきます。ご復活されたイエス様が私たちにとって平和の基だと言うのは、イエス様こそが、真の平和とは何なのかを、死なない愛と赦しを通して私たちに教えてくださったお方だからです。

ヨハネの手紙に、よく知られている「神は愛です」との言葉が記されているとおり、神さまの本質は愛であり、神さまの愛は赦す愛である、これが聖書全体で語っている重要なメッセージです。神が愛と赦しのお方であるから、私たちがどんなに罪に汚れた存在でも、だからこそ憐れみ、赦して、ご自分のものとして愛し、愛を教えてください。御子イエス様も、父なる神と共にわたしたちを愛と赦して癒し、養い、導いてくださっています。そんな愛そのものである「私の主、私の神」であるイエス様が、もしも十字架の上で死んで、それ

つきりだとしたら、それは「愛が死んだ」ということですし、「赦されることはない」ということになってしまいます。そして、繰り返しになりますが、愛が死に、赦しのない世界には、平和は訪れないでしょう。

今日のみ言葉の中で、イエス様は3度も、弟子たちのために平和を願ってくださっています。3という数字は、聖書では完全を意味していますから、あなた方は完全に平和であれとイエス様がおっしゃっておられるとも言えるだろうと思います。イエス様が願い、そしてわたしたちに与えてくださる平和の根底には、主イエス様の赦す愛があります。ご自分を見捨てて逃げてしまった弟子たち、そして、ご自分の復活を信じられなかった弟子たちを赦して、いつまでも一緒にいると約束してくださる赦しです。しかも、ただ赦されるだけではありません。あなたがたを、私の代わりに、福音を伝え平和をつくる使者として、遣わすまでイエス様はおっしゃるのです。自分を捨てて逃げた弟子たちに、ご自分がそれまでしてこられたつとめを託されるのです。

そのつとめを行うために、イエス様は、ご自分の代わりに聖霊までも与えてくださいました。イエス様は弟子たちに聖霊を与える時に、「彼らに息を吹きかけた」とあります。まるで息を殺して、怯え切って閉じこもった彼らの内側に、新しい、新鮮な、いのちに満ちた風を入れてくださり、私にかわって、あなたがたを守り導く神の霊が、あなたがたと一緒にいるから、大胆に、世界に出ていきなさいと、弟子たちをおそれから解放してくださったのです。それによって、彼らは、もはや、がっちり戸にカギをかけて、恐れの中、自分をガードしなくてもよくなったのです。彼らはイエス様によって、内側から守られてるのがわかったのです。こうして弟子たちは、世の中に出て行きました。

イエス様がくださる、愛と赦しに満ちた平和というのは、私たちがどんな状況にあっても、恐れに支配されずに、わたしは神さまの絶対的な保護のもとにあるんだと信じて、内側に得る安心感、平安のことです。だから、イエス様が「あなたがたに平和があるように」というその平和は、主に愛されてること、赦されてること、なにがあっても絶対に一緒にいて守ってくださることを「信じる」信仰がもたらす平和であって、その平和の中で、わたしたちは恐れゆえに固くガードしていた心を解き放たれて、愛し愛される関係、赦し赦される関係、平和な関係に導かれていきます。

しかし、愛と赦し、このふたつがあってこそ平和な関係が築けると口で言うのはたやすいのですが、特に「赦す」ということについては、それ自体が非常にハードルの高い神様からの要求だと感じたことのある方は、意外と多いのではないのでしょうか。

「赦す」ということについて考え巡らしていたときに、私の脳裏に浮かんだのは、映画「戦場にかける橋」のもととなった、タイとビルマ(ミャンマー)との間を結ぶ「泰緬鉄道」が建設された時の出来事です。これは歴史的に有名な話ですから、ご存じの方は聞き流していただければと思うのですが、第二次世界大戦中、日本軍はビルマ戦線の物資輸送のために、タイービルマ間に鉄道を通し、その際にクワイ河(クウェー河)に鉄橋を建設しましたが、その工事の際に、米英をはじめとする連合軍の捕虜や、タイ、ビルマ、マレーシア、インドネシアなど、日本軍の占領下にあった国の人々に強制労働をさせました。労働は一日 10 時間にも及び、非常に多くの捕虜や「ロームシャ」と呼ばれたアジア諸国の人々が、過酷な労働、日本兵による暴行・虐待や、食糧不足による栄養失調、またコレラやマラリアなどの病気で次々と命を落としていきました。

この日本軍による捕虜およびロームシャ虐待は、終戦後に戦争犯罪として断罪されましたが、この過酷な労働を生き延びた人々や、そこで死んでいった人々の遺族たちは、どんな思いでその後の年月を過ごしたことでしょうか。それを軽々しく想像して語ることは、私にはとてもできません。しかし、それにもかかわらず、虐待された人々や、その遺族の中から、日本を許そうという声が上がりはじめたというのですから、これは信じられない、驚くべきことです。

この声をあげた人々は、タイのクワイ河鉄橋のたもとに「許そう、しかし忘れまい」と刻んだ記念碑を建て、

それは今では誰でも訪れてみる事ができます。少し余談ですが、「戦場にかける橋」のモデルにもなったクワイ河の鉄橋のある、タイのカンチャナブリという町には「戦争博物館」がありますが、博物館ができた当初は、館内には日本語による説明文が一切なかったそうです。ところがある時、その博物館を訪れた日本人高校生が、日本軍による捕虜やロームシャへの虐待の事実や、戦争の悲劇を日本人も知るべきだと感じ、何人かの高校生と翻訳グループを組んで、博物館内の展示物の説明文を日本語に翻訳したのだそうです。

それにしても、「許そう、しかし忘れまい」とは、なんという決意に満ちた、勇気あるゆるしの言葉でしょうか。これは、日本軍による捕虜やロームシャへの蛮行を「なかったことにする」とか「過去に蓋をする」のとは違います。事実は事実として忘れずに、教訓として後世に伝えていく。同じことが二度と起こらないため、起こさないためにです。

事実は事実として伝え続ける。その事実から、なにかを学びとる。けれども、相手に対して自らの手で報復することをしない、たとえ自分には、相手に報復する権利があると心で感じていても、それを積極的に手放すという、成熟した、決意が込められた宣言です。「許そう、しかし忘れまい」との声をあげた人々の中には、多くのクリスチャンもいると聞いています。おそらくその根底には、イエス・キリストによる赦しと、赦された者として、復讐や対立よりも平和を求めて歩みたいという切なる祈りがあったのではないのでしょうか。

ご復活されたイエス様は、弟子たちを赦し、変わらず愛し、平和を与えて、そして言われました。「誰の罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。誰の罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されまゝ残る。」これは、かつて、教会が、自らの権威をもって人々に赦しを与える一方で、邪魔者や異端者、改革者たちを断罪し、処刑してきた歴史を肯定するものでは決してありません。これは、わたしたちが赦した人は神様からも赦されるけど、私たちが赦さない人は、最期の裁きの時に滅びるだろう、という話ではないのです。

「誰の罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまゝ残る」。ここで赦せずに「残った罪」は、イエス様を取り扱われるということです。赦されない罪を負う人に、気づきを与え、回心へ導かれるのはイエス様であり、最期の日に、赦されないまゝ残った罪を裁くのもイエス様です。現に今も、イエス様はすべての人々の魂に近づき、訴えて、神さまに立ち返るまで忍耐強く働いてくださっています。少し前に、仙台宮城野教会の聖研で「毒麦のたとえ」を読んだのですが、最期に悪を裁くのは、人ではなく主です。わたしたちは、神に変わって誰かを裁くことをおしる禁じられています。そうではなくて、「誰の罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される」のだから、あなたがたは赦し、そして、愛のある平和な関係を築いてほしい。赦すこと。それが、復活された愛、赦す愛のイエス様が、ご自分の弟子たち与えたご命令なのです。

これは、罪を裁くことよりも、はるかに困難な使命です。わたしたちが赦せば、その罪は赦される。どんな罪でも、です。平和をつくるために、こんなに重要な、しかも、わたしたちの内面に激しい葛藤をもたらすような、愛が試されるような決断を、イエス様は、私たちに求めておられるのです。

私たちは、イエス様の十字架の傷も、復活の姿も見たことがありません。それなのに信じ、「幸いな人よ」と祝福をいただいている私たちは、この主イエス・キリストのご命令を真摯に受け止めなくてはなりません。これは、主から祝福を与えられた人々が、復活の主の死なない愛、永遠の赦しの恵みをいただきつつ、果たして行くべき課題です。主に愛され、赦された者として、わたしもあなたを赦すと決めるところから、主の平和は広がってゆくのです。

祈ります。

祈り

復活された主イエス・キリストの父なる神様、  
主イエスを信じる信仰をいただく幸いを得たわたしたちを、  
終わりの時まで、愛し、赦し、平和をつくる生き方へと導き続けてくださいますように。  
主イエス・キリストのみ名で祈ります。  
アーメン。